

琉球大学学術リポジトリ

新進作家の自負と苦悶－宮城聡書簡、昭和九年～昭和十八年

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2013-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲程, 昌徳, Nakahodo, Masanori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/26014

新進作家の自負と苦悶

——宮城聡書簡、昭和九年～昭和十八年

仲 程 昌 徳

宮城聡が、改造社に入社したのは一九二二年（大正十年）。雑誌『改造』の編集部に着き、芥川龍之介等大正期の人気作家たちの原稿取りに駆け回り、やがて谷崎潤一郎、佐藤春夫等の知遇を得るが、一九二九年（昭和四年）、作家になりたいという夢を実現すべく退社する。

一九三四年（昭和九年）、里見弴の推薦で『東京日日新聞』の夕刊に「故郷は地球」を連載、夢見ていた作家への第一歩を踏み出していく。

改造社時代から新進作家として登場するまでの宮城の活動については、『新沖縄文学』に連載された「文学と私」に詳しい。しかし、その後のことについては、隔靴搔痒の感をいなめない。

例えば「日本が太平洋戦争へ突入途上にあつた頃、新しく発刊されたある総合雑誌に満二年勤めた」（『文学と私』〈連載2〉）『新沖縄文学』8号 一九六八年二月 冬季号」といったように、「突入途上にあつた頃」といった漠然とした記述、さらには「総合雑誌」の名前を伏せた書き方をしてるのである。

「新人作家」として登場して以後の記述が、婉曲な表現になっていたり素描程度になっていたりしているのは、雑誌の紙幅の都合というよりも、記憶の精度及び書きづらい問題があつたことよつてなのだろうが、一九三四年から一九四三年にかけての足掛け十年間に関して「文学と私」の記述を補つてくれる大切な一次資料が出てきた。

宮城の私信である。

澤田貞雄にあてた宮城の私信が、貞雄の息子澤田浩禧氏の所から出てきたのである。

澤田貞雄は、第十一次『新思潮』の編集兼発行者。『東京日日新聞』に菊池寛の推薦で「競争」を連載。宮城とともに「現文壇の大家五氏と、画壇の大先輩五氏とが、全責任を負ふて次の時代の文化に推薦するチャムピオン」(『夕刊小説予告 新人競筆陣 五大家推薦画期的企て』『東京日日新聞』昭和八年十二月二十六日号)であると紹介された五人の「新人」のうちの一人である。

澤田貞雄に宛てた書簡に記された宮城の住所は一度も変わっていないが、澤田の住所は何度か変わっている。浩禧氏が持参した宮城の書簡をその宛先別に分けていくと、次のようになる。

- 1、本郷区本郷六丁目喜福寺境内 封書一通、
- 2、芝区白金丹波町二〇 郵便はがき一通、封書二通
- 3、兵庫県加古郡母里村印南 郵便はがき七通、封書二通
- 4、兵庫県加古郡母里村、郵便はがき三通、封書四通、
- 5、鶴見末吉橋際 大塚様方 郵便はがき一通
- 6、兵庫県赤穂郡上郡町県立上郡町農学校内、封書三通
- 7、封書なし、手紙のみ四通
- 8、兵庫県武庫郡瓦木村高木石沢町西穂荘 封書一通
- 9、神戸市灘区八幡字備後町一―七八 六甲道アパート 封書二通

郵便はがきの検印、及び封書に貼られた切手等から、それぞれ読み取ることのできる年月日を写しておく、

- 1、昭和九年七月二十七日、
- 2、郵便はがき―昭和九年十月二十五日、封書―昭和九年九月十日、一通不明
- 3、郵便はがき―昭和九年十二月一日、十二月六日、昭和十年二月一日、昭和十年四月二十五日、昭和十一年七月十七日、昭和十八年二月二十日（二通）、封書―一通不明、一九七七―一一―九
- 4、郵便はがき―昭和九年十二月九日、昭和十八年十二月十七日（二通）、封書―昭和十二年四月十三日、昭和十六年八月二十一日、切手なし、検印不明二通、
- 5、昭和十一年八月四日、
- 6、昭和十二年十二月二十日、切手なし（剥落）二通、
- 7、昭和十二年九月二十二日、昭和十三年五月二十六日、昭和十六年□月十三日、昭和十八年二月二十七日
- 8、昭和□□年十月十日、
- 9、昭和十八年三月二日、昭和十八年三月十一日、

となる（以後年号は書簡表記に準じる）。その何点かについては、

- 2、不明の一通は、宮城初枝が澤田俊子にあてたもので、切手がはがれ検印の年月がなく25の日にちだけが
見える。

- 3、封書二通のうち一通は、三月八日夜の日付が封書の裏および手紙の終わりにあるが、切手が剥がれ落ち、日にちの9は分かるが、年月がない。あと一通は、一九七七—一一—九と封書の裏にはあるが、手紙の末尾には一九七七—一二—九となっている。切手が剥がれ落ちているだけでなく、検印の跡も見られない。
- 4、切手なし、検印不明の一通は、東京ダイアモンド社製の封筒が使われているが、そこに入っていたと思われる手紙はない。あと一通は、封筒裏に六日の日付、検印も年月が不明で日にちの6だけが見えるが、手紙の内容から昭和十年二月六日だと推測できる（剥がれ落ちていた切手があって、貼り合わせてみた）。
- 6、切手が剥がれ落ちている二通のうちの一通は、封書の裏に十月二十一日の日付、手紙の末尾に二十一とあるが、あと一通は切手、検印の年月日もなく、封書にも手紙にも日付が記されていない。
- 7、封筒なしで手紙だけが残っている四通の年月日は、それぞれ文末に九月二十二日、五月二十六日、十三日、二十七日と記されていることからの推定である。
- 8、封書の裏に十月十日の日付が見られる。切手の上の検印が鮮明でなく、何年なのかわからない。封書だけで、それに入っていたと思われる手紙もみあたらない。

といったように、補注が必要かと思う。

宮城が澤田貞雄に宛てた書簡はそれだけではなかった。浩禧氏は、そのあと、整理していたらまだ残っていたのがあったとして郵送して下さったのである。

宛先をみると

10、兵庫県神戸市生田区京町七九日本ビル澤田産業株式会社、封書一通

11、兵庫県加古郡稲美町印南、郵便はがき一通

となっていて、それぞれ

10、一九五八年五月二十四日

11、昭和五十六年元旦

の日付がみられる。10は、戦後初めての私信ではないかと思われるが、封筒のみで手紙は入ってなかった。

さらにあと一つ、宛名及び文末に記された名前の表記についても触れておきたい。

宮城から澤田に宛てられた私信は封書十六通（内一通は、宮城初枝から澤田俊子宛）、郵便はがき十三通であるが、封書十六通のうち四通の宛名は沢田、郵便はがき十三通のうち六通が沢田と表記されている。手紙の結びに澤田とあるのは昭和九年七月二十七日、昭和九年九月十日、昭和十八年二月二十七日（だと思われる「二十七日」の日付の見られる封筒なしの一通）、昭和十八年三月二日、昭和十八年三月十一日の五通で、あとは全て沢田と表記されている。澤田、沢田と二通りの表記を宮城はしているが、本稿では澤田浩禧氏が資料として持参された「人事興信録」（昭和五十八年三月）に記され表記にしたがって澤田を用いた。

澤田浩禧氏が持参および送付してきた宮城書簡は以上である。

これから、「文学と私」では落としていたと思われる件について触れた何点かを取り上げて紹介していくことにしたいが、その前に、ことわっておかなければならないことが幾つかある。

その第一は、澤田浩禧氏が、澤田貞雄に宛てた宮城の書簡を持参してきた時、封筒の中に手紙は入ってなかったということである。

澤田貞雄は、宮城から送られてきた手紙を読んだあと、それを封筒に戻すことをしなかったのか、或いは、浩禧氏が、点検のために出したままにしてしまったのか、その所を聞きそびれてしまったのだが、いずれにせよ、手紙は封筒に入っていない、手紙と封筒が対になっているような形で重ねられていたということである。

第二に、封筒の数と手紙文の数が同数ではなく、封筒の数に比べ、手紙文が四通多かった。それは、封筒の数が四つ足りなかったということではない。手紙が不明になっていると思われる封筒のものも三つあった。

第三に、注記しておいたとおり、持参してきたものの他に、その後見つかったということを送られてきた封書、郵便はがきがともに各一通ずつあるが、封書には手紙文が入っていないかかったということである。

第四に、切手が剥がれ落ちていて、その上に押されていた検印も消えてしまったもの、切手も検印もあるが、不鮮明で年月日を特定できないのがあるということである。

そこで、年月日の特定と、手紙文を封筒に戻す作業から始めなければならぬということになったのである。手紙と封筒とが対になって重なっていたかたちによりながら、作業には細心の注意を払ったつもりだが、不安がないわけではない。

宮城は、ほとんどの封筒裏と手紙文の終わりに、日にちを書き入れている。それで、手紙を封筒に戻すのは比較的簡単であるが、日付のないのもあって、その処理に迷わざるを得ないのがあった。

一例だけ上げておけば、文末に「二十七日」と記された手紙があつて、それがたまたま二通出てきたのである。その一通は、間違いなく昭和九年七月二十七日の検印および封筒裏に「七月二十九日」と記された封筒に納めることができたが、あと一通は、それをに入れるのに適切だと思われる封筒が見当たらないため、何年何月の「二十七日」なのか直ぐには判別できなかった。

一通は、いわば宙に浮いたかたちになったのである。そこでまず、用紙の点検から始めることにした。するとそれは、昭和十八年の手紙二通の用紙と同じであることがわかった。次にその内容を見ていくと、それもまた、先の二通と関係していて、二通に繋がる記述であることがほぼ確実だと思えるものであつた。

封筒の確定できなかった「二十七日」の手紙は、昭和十八年の二月二十七日に出されたものに違いないと推測されたことで、そこから逆に封筒を探したみたところ、これだと断定できる封筒が見あたらなかつたのである。

封筒とそれに入っていたであろう手紙とが別々になつていたため、そのようにいくつか戸惑わざるを得ないことが起こつたが、そのことを頭の片隅に置いて、澤田貞雄宛書簡を見ていくことにする。

○

宮城と澤田との書簡のやりとりがいつ頃から始まつたのか、そしてそれは、誰から始まつたのか、といったことを確定することは難しい。残されているもので、もっとも古い昭和九年七月二十七日の検印がある封筒に入つていたと思われる松屋製四〇〇百字詰め原稿用紙を用いた手紙があるが、それは次のように始まつていた。

澤田さん、只今御芳墨に預り誠に嬉しく有難く感謝致してゐます。雑誌私の方からお送り致せばよかつたと済まなく思います。あの作は今一度書き直す積りなのがそのまゝ、出ることになりまして意に充たぬ所が可な

りありますが後日手を入れようと思つてゐます。

貴方の御手紙を頂いて何か知ら兄弟に肩をた、かれて奮発を促されるやうな気分が心の底に感じます 今後吾々五人がもつと芸術の友として接近する機会も欲しい気がします 昨日「あらくれ」を見て何か私達も自由な発表機関があつたらと考へるにつけて貴方を彷彿と思ひ浮かべました

右の文面からすると、宮城の作品について触れた澤田からの手紙をきっかけに二人の文通そして交流が始まったのではないかと考えられるが、澤田が、宮城に手紙を寄せたのは、例の『東京日日新聞』への登場を機縁にしていたことがわかる。

澤田の手紙を受け取つた宮城は、澤田が読んだ作品について「意に充たぬ所が可なり」あつて「今一度書き直す積り」だつたと書いているが、その作品は何だつたのだろうか。昭和九年宮城が発表した作品は、「故郷は地球」の他に「生活の誕生」「椋の芽生え」「無花果の実一つ」「ジャガス」などあるが、「無花果の実一つ」は『若草』十一月号、「ジャガス」は『三田文学』十二月号で、手紙以後の発表であり、「生活の誕生」は『三田文学』三月号で、随分以前のことになる。相当する作品ということになれば『改造』八月号に発表された「椋の芽生え」以外には見当たらない。

澤田宛の手紙が書かれたのが「七月二十七日」ということは、澤田から宮城宛の手紙が来たのは「二十七日」以前ということになる。その時すでに八月号に掲載された作品を読んでいたというのはおかしい感じがしないでもないが、「椋の芽生え」の掲載された『改造』八月号の奥付を見ると、発行が八月一日、印刷納本は七月十八日になっている。二十日前後に、雑誌は書店に並んでいて、澤田はいち早く手に取っていたのではないかと思われる。

宮城は、先の文に続けて、「御勉強は如何ですか 一度御邪魔して御勉勵の様子を伺ひ度いと思ひます」と書いたあとに、

今度の拙作の評は口伝では割方好意を持たれてゐるやうに聞いてゐます 神近市子さんからははがきで褒めて来ました 尾崎士郎氏の友人達がいい作と云つてゐる由を昨日改造社の人が伝えてくれました 然しなか／＼未熟で思い及ばぬ観点がある上に知つてゐて直せなかつた所もありますので余り酷評だけは無ければいいかと祈つてゐます それにつけても仕事の友から激勵の言葉を得るのは何よりも嬉しく有難くなりました 是非あなたの作にも常に好意を忘れないで見逃さないやうにし度いと考へてゐます。私は蟄居は可りしてゐますので殆どいろ／＼の雑誌を見ないものですから・・・先日お話なされたあの雑誌はもうやつてゐられないですか、これから作品が出ます時はお互いに知らし合はうぢやありませんか。そしてお互に何かにつけ進出の便利もはかり合ふことも出来るのではないかと思ひます。

と、続けていた。

宮城は、自作の作品が好評だと伝えるとともに、仕事仲間からの激勵はなにもも代え難いといい、自分があまり外に出ないこともあつて新しい雑誌を見る機会も少ないと、創作に没頭していることをそれとなく伝える書き方をしているが、そこに「先日お話をされた」という文面があることからすると、すでに面識があり、話し合う機会があつたこともわかる。

宮城は「文学と私」の最終回で、やはり昭和九年に「新人競筆陣」で登場した五人のうちの一人森敦が芥川賞を

受賞したことについて触れたあとで、菊池寛の推薦で登場した澤田貞雄は、当時東京帝大の学生であったこと、結婚して「芝の清正公市電停留所の近くに住んで」いたこと、住まいが近いせいもあって「何時とはなしに知り合った」といったことを書いていた。

宮城と澤田は、少なくとも昭和九年七月二十七日以前から交流のあったことはわかるが、宮城が澤田に宛てた手紙は、ここから始まったように見える。そして、九年の十月から十一年にかけて郵便はがきが八通残されているが、九年十二月一日の郵便はがきには、「御帰省されたので大へん淋しくなりました 御郷里はやはり懐かしいいい所でせうね」とあって、澤田は、故郷に帰ったことがわかる。

十二月一日の郵便はがきは、台風被害はなかったかと尋ねたあとで、

創作は是非々々奮励して下さい。私も懸命(に)やります 拙作ジャガス 改造の人々は推賞してくれました。私は随筆十六枚かきましたから(特殊な雑誌に)出ましたら一興にお送りします 制作にも三枚半依頼されてかきました 郷里の新聞から五十枚の作品の依頼には恐れて随筆に勘弁しました 是非く貴兄が力作を励まるのを祈ります 私も今年中にはきつと今やつているのを完成する考へです 貴兄の栄冠を貴兄よりも祈つてゐる次第ですから奥様はたへず鞭をお忘れないやうに強く申述べて置きます

といったことを書いていた。

宮城は、『東京日日新聞』に登場したあと相次いで作品を発表し、にわかには新人作家として知られるようになっていたことがわかる。郷里沖繩の新聞社も、さっそく作品の依頼をしていて、宮城の夢みた作家の生活が、眼前し

はじめていた。手紙は、その高揚感がよく伝わってくるものとなっている。

九年十二月一日の検印がある郵便はがきの宛先は兵庫県加古郡母里村印南になっていることで、澤田が居を移したと、澤田の妻に澤田を勉励するようお願いしていること、はがきの宛名に貞雄と並べて「奥様」の文字が記されていることから、家族同士の付き合ひも始まっていたことがわかる。

九年には、澤田が故郷に帰ったこと、作品の発表が多くなつたこと、また「私も雄心勃勃たるものがあります御上京後うんと文壇のことを語りませう 改造は大谷 中谷二人の新人 新年号に入りますが その作は吾々に自信を持たすにすぎません」(九年十二月九日付け郵便はがき 改造社専用はがき)といったように、文壇を担って立つ気概が溢れんばかりになつていたことが分かるが、あと一つ「私は例の通り秀英舎通ひをしてゐます 今夜もおそくなりましたが」(九年十二月九日付け郵便はがき 改造社専用はがき)とあつて、原稿料だけでは生活できず、改造の出張校正に出でたこともわかる。

翌十年には郵便はがき二枚に書簡一通、はがきは、澤田の作品の件で「貴方の苦心の作が当選するのを祈つています 拙作も採用してくれはしないかと思つてゐますが。六十枚余りですが自分では相当行つてゐる積りでゐます」(十年二月一日検印) というのがあつて、そのあと六日の日付で、一日のはがきに続く手紙を送つてゐる。

最後の五六篇内には入ることは小生確信を持つてお伝へ出来ませんが、入選二篇の中を予期してゐることだけは昨年との与儀君(が当選を期待し)みたいなさして全く期待せずにあつた酒井氏が入選したようなことがありますが故虚、心坦懐に待つようにしませう

二月一日のはがきに宮城は、作品を四日に改造に持つて行く約束をしたので、三日には発送して欲しいこと、「改造ではもう荒選はやつたこと、今月一杯に当選作が決定する」といったことを書いていた。

そして六日の書簡になるが、宮城は、そこで、澤田から作品が届いたのは、四日の夜だったので、担当のものに渡したのは五日の朝になったこと、遅れて受け付けたことについては他言しないよう両方で守ろうと堅く約束した、といったことを書いていた。

右の私信は、そのあとに続くもので、「与儀君」というのは、與儀正昌のことである。昭和九年七月号に掲載された「第七回懸賞創作当選発表」を見ると、入選に大谷藤子の「半生」、酒井龍輔の「油麻藤の花」、選外佳作に與儀正昌の「人事」が入っている。ちなみにその時の選外佳作には湯浅克衛の「カンナニ」、安西冬衛の「地理」、石川達三の「蒼茫」、八木義徳の「猫小路」の子」などがあつた。

六日の書簡は、二月中には、当選が「殆ど決定します」といい「小生も一作出来ました 先に改造行つた時はそのようでした」と書いていたが、その「一作」が、何なのかはつきりしない。昭和十年に『改造』に掲載された宮城の作品には「ラッキー布哇」（十年十一月号）と『三田文学』（昭和十年七月号）に掲載された「罪」があるが、「ラッキー布哇」は紀行文であることからして、「罪」であつた確率が高い。

宮城が改造社に持ち込んだ澤田の作品がどうなつたのか、そのことについて触れた書簡はない。十年四月二十五日の検印がある郵便はがきは、「随分御無沙汰しました」と始まっていて、しばらく、音信が途絶えていたように見えるが、そこには「貴方がゐない東京は私には少し淋しい」「私の貴方に逢ひ度い気持は貴方の想像以上です」（四月二十五日）とあつて、何かこころ屈するものがあつたことを窺わせるものとなつている。

昭和十一年には七月十一日の検印が見られる郵便はがきがある。澤田から「ポテト」が送られてきて、早速子供たちともどもご馳走になったという、お礼のはがきだが、宮城は、その前に

澤田兄随分久し振り御無沙汰しました ハワイからお客が次からくとあり案内したり迎へたりそれからあつち向きの本を一つ書き下ろしたりですつとガタ／＼してみました

と書いていた。

宮城が、改造社の日本文学全集の宣伝のためハワイに渡ったのは昭和二年、そのあと、やはり改造社社長の肝いりで、十年に再渡布、そして翌十一年七月一日には東京図書株式会社から『創作 ホノルル』を刊行していた。「あつち向きの本」というのは、それを指している。

昭和十二年になると、郵便ハガキにかわって封書になる。

九月二十二日の日付のある、封筒の見あたらない手紙で、昭和十二年のものではないかと思われるのがある。その理由は、その用紙にある。昭和十二年四月十三日の検印がある手紙の用紙が、盛文堂製の四百字詰め原稿用紙で、それと同じものが用いられていること、二つには、「三等渡米記は九月の星座に出来ました」という文章がみあたることなどによる。しかし、確定するには不安がないわけでもない。というのは、宮城の『創作 ホノルル』が刊行されたのが昭和十一年七月一日で、そこに「三等渡布記」と題された作品が収録されているからである。手紙の「米」が「布」の書き違いだとすると、すでに創作集におさめた作品を、改めて雑誌に発表したということになる。

宮城の名前が、「星座」の同人名簿に現れるのは昭和十二年五月一日発行「星座付録第六号」からである。『星座』

が同人誌であったことからすると、作品の発表は同人になって以後ということになるかと思うが、同人になる前に、どうして同人誌に作品を発表することができたのだろうか。

『星座』の同人に與儀正昌がいた。與儀は創刊当初からの同人であったことから、彼の強い推薦で、作品を掲載することが出来たのではないかとも思われるが、よくわからない。それは、昭和十一年の九月号（第二卷九号）『星座』を見ればたちどころに氷解するだろうが、あいにく、復刻されたマイクロフィッシュ版でも欠号になっていて、今のところ、照合のしようがない。

九月二十二日の日付のある手紙を、昭和十二年のものだとする根拠は、手紙の用紙にあるが、そこには、また次のような言葉が記されていた。

今秋はほんとにやりませう　ほんとに我等は文士として文士の体面を泥で塗らないで我等二人の天下を招来
しませう　学兄も腕節が強いし現在のやうなへなく、ぺんは弱いから我々二人の腕には一寸むかなかつたが、
これから世の中が物騒になつたので　いや文壇といふ壇上が非常時になりましたから是非乃公等が出ないといはゆる柔弱の文士共を取り抑へが出来ません　僕も唐手でやりますから学兄は一つ團先生に教つた古今の
美学と若い澆刺たる元気でやつて下さい　もう徹底的に創作して下さい　来年の芥川賞を取らずば止まぬ意
気でやつて下さい

「柔弱の文士共」というのは、いったい、どういった「文士」たちを指していたのだろうか。「世の中が物騒になつた」といい、「文壇といふ壇上が非常時」になつたというのは、多分、十二年七月「華北蘆溝橋で日華兵衝突、日華事

変勃発」(『現代日本文學年表』現代日本文學全集別巻2 筑摩書房昭和三十三年九月)といった事態の現出と関係している。「柔弱の文士共」というのは、そのような事態と無関係な作品を書いている作家たちを指しているようにも見えるが、宮城の口吻からは、何か、ただならぬものが伝わってくる。

宮城は、そこで、澤田に作品を改造に出したらどうかといい、「何でもいいから大いに書きませう 私も書きませよ、必ず書きますよ、私も野心持っています 貴兄がのうくとしてゐてはいかんですよ 私の場合は少々俗事に災されるので少し割引きして下さい 然し学兄の場合は外に何もないのだから緊張しないとだめですよ」とたきつけたあと、

生馬の目を貫く文壇もいいが、私達はそんな小股すくひはやらす大上段から打ち下してマットの上にノックアウトさせる闊歩をやりませう 私はもう四五十枚の小説は凡そ意味ないから一つ最小限度五千枚の作品カラーマーズフの兄弟の兄弟分の原始から文明といふウエールズ張りの名を持った傑作を世界の文学史の山脈にヒマラヤ山脈を生まうと考へてみます

学兄は芥川賞と改造一等を狙つて射止めて下さい、改造一等や芥川賞は富士山に登るのですから手近かです いです わたしのヒマラヤはゆつくりく準備を整へこれから欧州航路に乗つて印度で下船と云つた風に手がこみます 私等は何にせよ大いに励ましてやりませう 僕の出来ることは必ずやりますよ

と書いていた。

宮城の意気や天を突かんばかりで、いささか誇大妄想気味だといつていいが、一体何が、彼をそれほどにさ

せたのだろうか。

昭和十二年は、「日華事変」の勃発によって、世の中が騒がしくなっていくが、宮城の周辺も、にわかにあわただしさを増している。

切手が剥がれているばかりでなく、手紙にも日付が記されていないため、これも推測するしかない手紙だが、昭和十二年の十一月ごろのものではないかと思われる一通がある。それは、十二年十二月□日の検印がある手紙の宛先と同じ宛先になっていること、また同じ宛先になるもので、切手が剥がれていて年月はわからないが、封筒の裏および手紙に二十一日の日付の見られる手紙の用紙が「ダイヤモンド社原稿紙」と印刷された原稿用紙を用いていることなどによる推測だが、宮城は、そこに、石坂の「若い人」の売れ行きや林美美子の作品の印税が「一万円に近い」といったこと、そして「五円十円に苦しむ不甲斐なさしみく感じます」という嘆きとともに「それまでお話しませんでした。私も新春を期して必ずやつつける考へで懸命になり、妻は郷里へ四人の子を連れさせて追ッ払ふことに確定、来る十三日の便で神戸を立たさうと思つてゐます」といい、次のようなことを書いていた。

私も来春には出来さうな曙光を認めてゐます。六日に出る改造の臨時号には中間の駄文を二十二枚書きました。が追ひくゝ私の喜びもお伝へ出来るのを祈つてゐます。妻を帰す旅費を苦面^{ママ}中ですがそれさへ済めば、最大スピードで、長男二男の二人を膝元に従へて三人でうんと勉強する考へでゐます。私来春には中公まで乗り出す考へですから貴兄も絶へず意地悪い目を自分に向けてみて下さい。私の書き度いことは、いつもその励まし合ひです。

そこにはまた「日本でも百万の本が売れること分りました 露宮の歌は百万枚突破の曲です 二円の本 百万の印税は二十万円です お互 百万売れる本を書く意気がなによりです」ともある。

昭和十三年の春には何か出来そうだといひ、「六日に出る改造の臨時号には中間の駄文を二十二枚書きました」と認めているが、「改造 南方支那号」が出たのは、十二月十六日で、宮城はそこに「琉球を繞る日支関係史譚」を発表していた。

それは、十二年九月に発表した「浜木綿、まに、蘇鉄等」に次いで書かれた沖繩に関する隨筆であるが、「駄文」と書いてあるところからすると、小説でないことに忸怩たるものがあつたのだろう。

妻を郷里に帰して、創作に専念したいという思いとともに、よその印税のことを書き立てているところから察するに、生活にそれほど窮していたのではないかと思われるが、創作への意気込みはいささかも衰えてない。

昭和十二年の十一月ごろのものではないかと推測される一通とは異なり、検印および封筒裏に記された日付から昭和十二年十二月二十日に書かれたことがはつきりしている一通がある。それは、半紙に筆でしたためられている。

澤田は、「妻を帰す旅費を苦面中^{マツ}」だと書いていた宮城の先の手紙を受け取つて、さっそく「餞別」を送っていた。十二月二十日の宮城の手紙は、それに対するもので、「先には御厚情に溢れた御餞別を頂いて全く何とも申し上げようありませんでした 而も行かないと来て居るので少からずどきまぎの態でしたが外ならぬ貴方の御厚情厚がましくそのまゝ、頂きました」とあり、宮城の窮状態にあまりあるが、そこには、さらに驚くべき事が記されていた。「妻の郷里行き」は当然実現しそうもないが、「然しその中に事情が変じました」として

何時になるか知りませんが私が外地へ行くことになるかも知りません。朝鮮です 総督府か学校か何処か知

りませんが大体決定しています 拓務参与が伊礼といふ代議士でいい友人です所から先に満州朝鮮旅行中に話を纏め今度朝鮮の政務総監や学務局長が来て愈々履歴書も出しました 書くことを特色として採用する由で その点非常にいい条件で待遇もできるだけよくさせるとのことです

とあり、そのあと、先の手紙同様、石坂の今年の改造社からの印税が六千円を超したそうだったこと、「人の仕事を羨むと共に 是非私達もやつつけて見ませう 私は朝鮮にでも行かぬと生活苦でどうしても仕事が出来ませんから 朝鮮へ行つて きつと仕事します」と書き、林芙美子もやはり改造から出した本の印税が一万円にのほるそうだといい、「いい物書いて二人で轡を並べて一年に一万円と云はず二三万円を取つて見ませう 三四年辛抱しませう」と書いていた。

手紙は、そのように、朝鮮に行くこと、お互いにいい作品を書いて石坂や林にまけないくらいの印税を手にしようといったように、近況および抱負を述べたあと、「学兄に改めて誠に申し上げ兼ねますが御相談します」と前置きし、学兄に改めて誠に申し上げ兼ねますが御相談します 妻も帰す旅費作つた位でしたがすっかり消えてこれから新年の方策ですが 若し貴兄に十円位繰合せ出来ましたら例により無期限で何とか願へないかと非常に感心しないお願いをいたします 先のだつて決して忘れませんし何時かはと考へますが今までは駄目でした 今度本職つきましたら書く分は予知外の収入にして少しゆとり出る積りであります 何卒悪く思はないで下さい 又学兄の御都合悪かつたらちつとも御心に止められずにおて下さい 誠に御恥かしく済みません

と借金の申し込みをしていた。

十二月二十日の手紙は、正月を迎えるためのお金を貸してほしいというお願いをするために書かれていたといっている。宮城は、誠に逼迫していたのであるが、そのなかで「三四月号位には拙作改造に採用なるかと思つてあます。これはやはり生活暗澹の材料ですが略及第してあます」と手応えのある作品を書きあげていたこともわかる。

昭和十二年十二月二十日の手紙を受け取った澤田が、それにどう応対したか分らないが、その後、宮城に何度か便りを送つただけでなく、上京して会つてもいたことが、五月二十六日と文末に記された松屋製四百字詰め原稿用紙を用いた手紙からわかる。

五月二十六日付けの手紙は、「澤田兄御無沙汰いたしましたことにすみません。両度のおたよりを受け委しく思ひを語らうと考へ乍らつい今になりました。私の身近はちつとも予定が実現しませんで煩勞な日々ばかりで御上京の折も二人で愉快に語れなかつたのがどんなに私に残念でしたことせう。きつと貴方は私の苦境を察して見送りもさせなかつたのだらうと恨むよりも感謝が起きました」と書き出し、生活に煩わされて書けないが「若し、状態さへよくなつたら書き度い書かうとは考へてゐます」といい、就職運動をしているが、年をとるとそれも難しいこと、「毎日くよくよして石坂の百分の一万分の一もし得ない自分をつくつく考へます。これは私のやうな立場に立たないとほんとにしみくく分りませんよ」と、嘆いたあと、

朝鮮行きも難しいようです。朝鮮だけは行ける積りでしたが駄目でした、東京で頑張つて見ます。やつと文芸の拙作も七月号には出ることの由ですがこれとて出ないでは分りません。幸ひに出たらこれをきつかけに少しでも進歩し度いと考へてゐます。

と書き送っていた。

十二月二十日の手紙に「大体決定しています」と書いていた朝鮮行きの夢が破れたことで、長い御無沙汰になったのではないかと思われるが、宮城は、生活に追いつめられながらも、作品を書きたいという思いを捨てる事はなかった。

昭和十三年『文芸』七月号には、宮城が「出ることの由ですがこれとて出ないでは分りません」といつていた作品が掲載されていた。「応急ならず」である。

○

昭和十三年の五月二十六日以後、十四年、十五年と二年間の手紙は残っていない。その間宮城からの音信がなかったのか、澤田が保管してなかったのかはつきりしないが、次の文面からすると、音信が途絶えていたようにも見える。

今日はおたより嬉しく頂きました、貴方の生活が見る思ひがします 学校の先生からの急転向も貴方には不自然でないやうに思はれます 皆様御丈夫に御過しのやうで喜んでゐます 私方も皆元気にしてゐます 公論すつかり止めました 家に引つこもつて何するとなしに過ごしてゐます

十三日の日付が見られる手紙は、その入っていた封筒が見当たらないので確実な年月はわからないが、手紙の文末に八月十九日と記された昭和十六年八月二十一日の検印及び封筒の裏側に八月十九日の日付が見られる手紙とほぼ内容がかさなっていることから、昭和十六年だと推定できるのだが、宮城は、「公論」をやめたこと、澤田も

また職を変えていたことがわかる。

宮城は、朝鮮行きが駄目になったあと、公論社に勤めていたのである。澤田は、別の高校に移らず、会社勤めをするようになったのであろう。二人共に、十三日の手紙から、身近に大きな変化があったことがわかるが、その他の情報にはわかりにくいところがある。

一つは「仏印あたりへ乗り出しませんか」というのであり、あとの一つは「米国へ船が出ますので 忙がしくなりましたが一つ落ち着いたらゆつくり書きます」というのである。

八月十九日の日付が見られる手紙は、澤田から「結構な送り物を頂いた」お礼の手紙であるが、そこに「私も公論を退めたり ハワイやアメリカからの親戚や友人の接待など毎日ガタガタした日はかり過ぎて失礼しました」とあり、「米国へ船が出ますので」は、このことと関係するものであったのではないかと想像されるが、「仏印」については、やはり謎としかいいようがない。

十六年八月十九日の手紙のあと、十七年はなく、十八年になって二月十七日の検印が見られる郵便はがき二通、二十日の二通、二十七日の日付がある封書なしの手紙、三月二日の検印がある封書、三月十一日の日付がある封書が残されている。

十八年にはそのように二月から三月にかけて立て続けに郵便はがき及び封書を宮城は書き送っているが、それは宮城の息子が姫路の高校を受験することになったためであった。

二十七日の日付の見られる手紙は、旅館に宿泊できない場合は、奥様に面倒をかけることになるがよろしくお願ひしたいとしてその日程を伝えているが、その前に、次のようなことを書いていた。

力作御提出のこと私まで何か希望に充つた気持ちがあります。当選をお互に祈つておませう。若しもの場合は御はがきの趣き大丈夫です。予選のことについては宮本君へもよく話して通過確実にします。川端氏から林房雄氏（選者の由）へ何とか巧く渡りあつたがいいですがね。それですと大変有望と思ひます。私も少年用の本を依頼されてゐますが、その依頼者が急死してまだ運が来ないのかと少し気を落してゐます。紀元社といふ少年物を出す名義人である親しい者でしたが死なれて失望してゐますが仕事は続ける考へでゐます。

ここには、澤田がまだ創作を続けていたこと、そして、宮城にも「少年用の本」だとはいえ依頼があつたこと、しかし依頼者の死でそれも流れてしまい、意気消沈しているといった状態にあることがわかるが、仕事への意欲は失つてなかつた。

三月二日の検印がある手紙には、受験の日にもせまり、いよいよ奥さんに面倒を見て頂くことになるということを書いたあと、

御作の件は 私が出かけてよく連絡取ります。その上で御知らせします。仕事のことも 今後お互いによく連絡取り合はふと思ひます

とあつて、澤田の作品の選考結果がまだ出てないことを知らせている。

そして、三月十日の手紙には、妻と子どもが世話になつたお礼を述べ、二十七日の手紙には

改造の方は非やつて下さい　私も勉強します　寒くて今はまがつてゐますが　そろ／＼やります

とあるのが見られる。

昭和九年登場組の二人は、お互いに励まし合つて、戦時下にあつても創作に励んでいたことがよくわかるが、宮城にはかつての元気が見られない。息子の受験の心配もあつたとはいへ「まがつて」いるという言葉には、何か尾羽うちからした様子がみえる。

澤田と宮城との戦前の文通は、これを最後にしている。戦争が、厳しさを増していったことで手紙のやり取りが不自由になつたということもあるだろうが、それ以上に、二人ともこれまでのように小説を書くことがなくなつていたことによるのではなからうか。小説を書いて、沢山の印税を得たいと野心を燃やしていたものが、小説を書いてもそれを発表する場所が少なくなつたばかりか、書くとすれば、戦意高揚をうたつたものでなければならぬやうな情況になつていたのである。私生活の窮乏、貧苦を書くのに精魂傾けた作家には難しい時代がやつてきていたといつていいだろう。

○

宮城から澤田への戦後の便りで、保管されているのは、一九五八年五月二十四日の検印がある那覇から送られた航空郵便、昭和五十六年元旦の年賀ハガキそして「一九七七―一一―九」の日付が封筒裏にみられる切手なしの手紙の都合三通であるが、一九五八年のそれは封筒のみで手紙は残つてない。

封筒裏に一九七七―一一―九の日付（手紙には一九七七―一二―九）が見られる手紙は、次のようになっている。

御健壯快で御発展のことおよび申し上げます 長い御無沙汰すみません
突然奥様から御電話を頂きまことに御懐しく昔がま近く甦りました。

澤田さんは 御令息様方御令嬢様打ち揃って御健かにしかも皆様御出世のおこと人生の悦びこれに勝るものはないと存じます 重ねて祝福申し上げます 降而私は、御別れ以来人生の苦難ばかりに終始いたしました
帰郷那覇に在住しまして世すぎの苦しみは取り除くことが出来ました 御存じの亡妻は二十余年前に世を去り新しく人生の再出発を故郷にもとめました。故郷に帰って以後は文学関係に日を過しましたが専心文学に精進することがなくアブ蜂とらずの状態で過し後悔さきに立たずの言葉通り怠け者の自省をいたしております
す たゞ琉球政府の委嘱で沖縄県史の中の戦争記録一卷(約千余頁)を聞き書きに三年八ヶ月を費したことは、ちよつと充実したような気持ちで取り組み中央でも朝日毎日他各新聞が取り上げてくれました。この巻は今では全く入手出来ませんので澤田さんへも御送り出来ないのを残念に思います
澤田さんもきつとお勉強なさっていられることと思います 澤田さんはお若いのでこれからいくらでも文学のお仕事も可能性が多大であります

今度の文化勲章授省者アツに山本丘人さんがいられましたが一つの仕事に打ち込んでいる人が最後に栄冠を得るものと感じます、わたくしと一緒に改造時代に私小説を主題に書いていた上林暁が中気で寝た切り病人でありながら今度筑摩書房から全集が出ますが、元気でありながら何も出来ない自分を後悔しています。澤田さんはこれまでいろいろお活躍されたし、文学も御気持ちでいくらでもお出来るなる春秋をお持ちになつていられる

しかしこの人生で何をやってもいいと思います いつかお目にかかると 心ゆくばかり語る日のあること

を願います、毎年一度だけは上京します 関西に行く機会がありましたらお目にかかりたいと思っています、澤田さんも一度沖縄にいらつしやいませんか。

ますます御健壯で御活躍を祈ります 空港で御令閨様にお目にかゝれること□期待しながら書きました 乱

筆御免下さい 七七一—二一九 那覇市で 宮城 聡

澤田貞雄様

澤田の「奥様」からの突然の電話は、沖縄旅行に関する件であったに違いない。「七七一—二一九」日付の手紙の封筒に切手や検印が見られないのは来沖した「奥様」に託したことによるのだろう。

手紙の文字の揺れ具合から宮城が高齢になっていたことが窺われるのだが、宮城はその時、八十二歳になっていた。

昭和五十六年元旦の年賀はがきは、

早春に御来沖されませんか 大へん暖かいのです 海洋博跡にロイヤルホテルがありますが 大変
いいところです

沖縄は近いですよ、是非一度いらして下さい

と、沖縄に遊びにきたらとのさそいをしているが、はがきの宛名は、「貞」と並べて「定」と書かれているだけ

でなく「雄」が「男」となっていて、名前の表記が定かでなくなっている。七七年から四年しかたっていないが、記憶が薄れていたとしても不思議ではない。宮城は八十六歳になっていた。

宮城から澤田に宛てられた私信は、多分これが最後のものになったのではないか。

昭和九年から昭和五十六年まで、四十七年間、年数の長さからすると、残された書簡はそう多いとは言えないだろうが、これらの書簡が、宮城の回想「文学と私」を補うものとして、大層貴重であることは間違いないはずである。